

悩み・苦痛の逆療法

第1部 解脱の真理の発見

(46) 性善説か性悪説か

孟子は、「人間の本性は先天的に善であり、悪い行為は物欲の心がこの性をおおうからである」と説いた。これに対して、荀子は、「利己的心情は根源的なものであり、人間の本性は悪である」と説いた。

これについて仏教は説いているが、私流に要約すると、「人間の心も含めてすべての存在は、心（阿頼耶）が作り出したものである。すなわち唯心（唯識）論なのである。そして、煩惱も、善心も心を作り出したものである。迷妄にとらわれた凡夫の身には煩惱がたまってしまう。煩惱を減らして、善心を増やすことによりエゴを克服して悟りに至る」と言っているのである。しかし、どのようにして煩惱を減らし、善心を増やすことができるかについては説明していない。

これに関連して、乳業メーカーの砒素混入事件を扱った中坊弁護士が、瀬戸内寂聴氏とのTV対談で、次のような話をした。

「砒素中毒で心身に障害があり、十代で死亡した少年の母親から聞いた話であるが、その息子が障害で覚えた言葉はたった三つだけ。『マンマー（飯）』『オッカー（母）』と『アホー』だった。『アホー』とは外の間人が言った言葉だが、どんなことをされてもその息子は外では泣かなかった。しかし、家に帰って来ると、息子は母親の手を取り、さめざめと泣いた」というのである。中坊弁護士は、「世の中は冷たいものだ」と言い、瀬戸内氏も同感していた。

もらい泣きするような話である。この心身に障害のある子に「アホー」と言ったのはどんな人間だろうか。根っからの悪人であろうか。私は、どこにでもいる普通の子供だったと思う。ただし、一人だけが言ったのではないだろう。多くの子が言ったからこそ、この心ない言葉がこの息子の心に刻まれたのである。どのような子も心の中には、善心と悪心を持っている。その悪心が言わせ

た言葉なのである。現在の子供は、不平・不満に耐えることができないから、余計に、このような悪心が表れてしまうのである。従って、子供に不平・不満を味わい噛みしめ更には強めることを修練させなくてはならないし、悪心をそのまま言動に移すことがいけないことを教育しなければいけないのである。

世の中に 鬼がいるとは 言うけれど

人の心に 鬼は隠れけり

と、私は考えるのである。

すなわち、人間は性善説だけとか性悪説だけとかで律せられるものではなく、善心と悪心が混在しているのである。言ってみれば、性善悪説なのである。

前述の仏教の言っていることについても、煩惱を減らし、善心を増やすための出発点は、煩惱の苦痛を味わい噛みしめ更には強めて、正しく煩惱に耐えられなくてはならない。その結果として、くもりなき悟性により、善心を増加していくことができるのである。煩惱に惑わされている時に、善心を増やそうにも、その心の余裕はないし、何が善であり、何が悪であるかを正しく判断することもできないのである。

これを短歌にすると、

人は皆 善悪の心 併せ持つ

苦痛噛みしめ 善心増やせ

となる。